The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第50号記念号刊行にあたって
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 50 号記念号刊行にあたって

和田　章男

日本最初のフランス文学学術誌として、1953 年に『ガリア』第 1 号が刊行されてから半世紀あまりが経ち、今回 50 号という節目の号を発刊することになりました。10 号までは社会的状況、経済的事情、教員の都合などによって年 1 回という刊行が叶いませんでしたが、それ以降は合併号を除いては毎年規則正しく刊行を続けてきました。研究室の本棚に並ぶ 50 冊の『ガリア』はフランス文学研究室とガリア会員の研究の歴史そのものです。

『ガリア』の生みの親である仏文学講座初代教授の和田誠三郎先生は、第 1 号の「あとがき」に次のように書いておられます―「外国文学も研究となると、色々目に見えない制約をもってくる。然しいつ迄も内地向の紹介がその全部であってはなるまい。」『ガリア』は外国文学の「紹介」ではなく、「研究」をめざして誕生したのです。困難な研究の道を、「堅実に一歩一歩を踏みしめて進もう」との言葉に、並々ならぬ決意が表れています。「研究」である限り、外国人であることに甘えることはできず、フランス人や諸外国の研究者とも同じ土俵に立って、研究成果を発表する必要があります。

したがって、『ガリア』の特色はフランス語によって執筆された論文が多いことです。第 6 号（1961 年）に原亨吉先生が日本人としては初めてフランス語で論文を発表されました。その後、第 15 号（1975 年）では掲載論文 3 篇すべてがフランス語による執筆となり、この伝統は現在に至るまで受け継がれています。『ガリア』掲載論文の細目がフランスの権威ある文学研究誌 *Revue d'Histoire littéraire de la France* の書誌に載せられ、国際的な学術誌として認知されるようになったことはとても誇らしいことです。本記念号では第 31 号から第 50 号までに掲載された論文タイトルをリストアップしました（創刊号から第 30 号までの論文タイトルは第 30 号に掲載しています）。その大部分をウェブ・ガリアで読むことができます。

初期の頃の『ガリア』を手にとると、表紙は色あせ、紙面は黄ばみ、積年の重みと時の経過が実感されます。定年退官によって会長が変わり、執筆陣も編集委員も入れ替わっています。自筆原稿やタイプ原稿での入稿も遠い昔の話になりました。50 冊の『ガリア』は流れゆく時間の形象のようにも見えます。このような理由から、本号では研究論文に加えて、フランス文学における「時の経過」をテーマとした記念特集を組みました。中世から 20 世紀後半まで、各時代を代表する作家・詩人を採り上げ、それぞれの作品において過ぎ行く「時」がどのように表象されているかを解説しています。「時」をテーマとした文学史としてお読みいただければ幸いです。時代の偏りはあるものの、これだけ幅広く論考を集められるの

も、ガリア会員の層の厚さだと誇らしく思います。

『ガリア』が「研究」の場であることには今も昔も変わりません。ただ、昨今大学の活動においては従来以上に「教育」が重視されています。「教育」を広くとらえるなら、「知の普及」ということでしょう。本号の前半は「研究」、後半は「知の普及」に主眼を置いています。フランス文学の「知」は研究者が独占すべきものではなく、広く普及させることも必要です。『ガリア』は常に高い志を持って、第 100 号をめざして「堅実に一歩一歩」進んでいくと信じています。